

研究者・教育者コミュニティ形成基盤としての大学 院生教育

唐沢かおり
東京大学



「コミュニティ形成基盤としての」…

➤ 「すぐれた研究者を養成する」

- 自明の教育目標

それにプラスする視点として

➤ 研究・教育活動を引き継ぎ次世代を育てる人たち

- 心理学研究・教育活動の場やシステム
 - 大学・学会・研究会・科研費・査読…
- これらが維持され健全に機能することで、知が展開し、引き継がれていくことが重要
- これらの場・システムの本質は、研究・教育に関わる対人相互作用であり、そこで健全に機能する人材が必要

では具体的に何が必要か？

- 優れた研究・教育をおこない、研究者コミュニティの発展に寄与する人材に求められるものは・・・？
 - 心理学の基礎知識、専門的知識
 - 研究立案能力、実行力
 - 想像性、独創性
 - 日本語、英語におけるコミュニケーション能力
 - 視野の広さ、専門外の事柄への興味
 - 研究者・教育者としての責任に関する自覚
 - 他者と協働し研究・実務を行う力
 - LABを運営維持するマネジメント力
 - 教育者に求められる指導力、人望、人徳
 - などなど……

考えるべきこと

- これらを効率よく・効果的に達成させるには？
- 院生がこれらを達成するために勉強せざるを得ないような仕組みは？
 - …という問いは、抑圧的な環境を生む危険があるのではないか…
- つまるところ、学生の、能力・努力・運の問題？
 - これは教育責任の放棄であろう
- リソースの制約や大学・学会の現状を踏まえて、大学カリキュラムとその外でできることを考える

現状下で何ができるのか

- アメリカ的な入念なプログラムが理想的？
 - ←日本の現状批判での参照点にもなるが……
 - 京大の自由さには感謝しつつ、若干、恨めしいが……
 - 「大学」環境の相違⇒大学院における授業の位置づけとリソースの差
- 現状を踏まえた「適切」な教育体制とは？
 - 授業・カリキュラムなどをどう構築するか
 - 「授業外」の教育機会をどのように利用するか

制度(授業・カリキュラム)に関する問題1

➤ 「知識・力量」養成←充実したカリキュラム？

- 専門分野に関する、正しい、幅広い、深い知識
 - 授業の充実をはかることで、対応は可能？
 - 大学院レベルの「概論」や「一般教養」授業の可能性？
- しかし、実践的な「研究活動経験」が伴わなければ、活用可能な知識への展開は難しいだろう

➤ 「充実した…」とリソース問題

- 大学内、または大学間連携による対応(フォーマルな対応)が可能なのか？
- 研究会や個別のネットワークを利用したインフォーマルな対応の方が効率的なのか？

制度(授業・カリキュラム)に関わる問題2

➤ 良い教員になるためのトレーニング

- コミュニケーションスキルに関わる授業
 - プレゼン・論文の書き方は授業化されやすいとしても…
 - 「授業」により、良い授業を行うためのトレーニングを与える？
- 「授業」以外の様々な場での相互作用からの学習に依存
 - TA経験、学部生に対するインフォーマルなアドバイスをを行う経験、学会・研究会発表…

授業外での教育の重要性

- 「授業」以外の場における学生自身の研究・教育活動を基盤にした「教育」
 - 単に授業に真面目に出ているだけじゃあ、「良い研究者」になれない
 - 単に話がうまいだけじゃあ、「良い教員」ではない
- 研究も教育も、具体的な実践であり、その力量は、WBの前に座っていて身につくものではない
- 研究者コミュニティの活動を相互作用の中で支えうる人材に求められる使命感とか、責任感とか、メタ認知とか、他者への配慮とか、思いやりとか、人間関係を築く能力とかも、同上

授業以外での「教育」で何をしているのか (できるのか?)

- 研究室で行っていること…
- 「研究を実施→論文執筆」の繰り返し
 - 研究計画を主として立案した人が、論文の第一著者となる、書かなければ、それでおしまい…
 - 研究計画の策定～分析・考察→RMで発表
⇒Go/No Go+個別相談⇒学会、研究会発表、論文執筆
 - 学生が書いた論文の修正・添削⇒投稿⇒査読コメント・改稿原稿の修正・添削

伝えている(つもり...)ことの具体

➤ 良い研究の条件

- 理論的・実践的意義、操作と概念の対応、要因の統制、代替説明の可能性とその排除～どうフレームしたら面白くなるか

➤ 論文の書き方⇒文体、構成、理論展開

➤ 査読への対応の仕方・良い/悪い査読コメントの指摘

- どうしたら自分が面白い・価値があると思うことを他者に伝えられるのか

➤ 「研究」「教育」へのスタンス

- 他者の興味・研究への敬意や、自分の研究に対する謙虚さ・自己批判と自信

➤ よい研究者・教育者・査読者・マネージャー・同僚になってほしい

気をつけないといけないこと

- 教員の「独断的」な研究・教育観に閉じない
 - ⇒ゼミ内に閉じこもってはいはだめ
 - 学会発表・研究会等への参加など
 - 他領域の研究者との相互作用の機会
- 「論文を書く」こと&「外に出て行く」ことに関して適切な「プレッシャー」の与えかた？
- 研究・大学教育の「主体性や自由度」に対する尊重とそれに甘えない態度の養成？

研究・教育への自信と敬意の両立

- 自らの研究の価値への信念と自信
 - 何のために自分は研究をしているのか
 - 名声・地位保全・個人の利得のためではなく、その研究そのものに価値があると信じるから
- 一方で、自分の研究への価値付与→独善の危険
- 他者への「洗練された敬意」が必要
 - ←自己批判力と自分・他者への信頼の両立
 - ←よい教育環境＋自らの研究・教育活動に対して正当なフィードバックを得る経験の積み重ね

必要だと思われること

- 実践的な研究・教育活動を通しての教育
 - 「論文執筆⇒査読」に代表される「主張⇒批判⇒回答」のサイクルにおける教育はそのひとつ
 - 多様・良質のフィードバックを得る経験
 - コミュニティのリソース(学会等)の相互活用
- コミュニティというシステム全体の正当性・信頼性の維持
 - 教育する立場にある個々人に対する正当な存在としての評価や信頼
 - よい研究・教育への貢献を正当に評価する力量をコミュニティが(集合的に)持つ